館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第33集

館林市内遺跡発掘調査報告書

新倉前遺跡（平10地点）
高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）
伝右エ門遺跡（平10地点）
笹原遺跡（平10地点）

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第33集

館林市内遺跡発掘調査報告書

新倉前遺跡（平10地点）
高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）
伝右エ門遺跡（平10地点）
笹原遺跡（平10地点）

館林市教育委員会

例　　言

1．本書は平成10年度に館林市内で実施した遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

平成10年度に実施した発掘調査は次のとおりである。

・新倉前遺跡（平10地点）

・高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）

・伝右エ門遺跡（平10地点）

・笹原遺跡（平10地点）

2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教　育　長　大塚文男

教育次長　笠原　進

主　管　課　文化振興課

文化振興課長　今井　敏

文化財係長　石井正和

主　　査　新井直次

学　芸　員　岡屋英治（担当）岡屋紀子（担当）黒澤文隆　阿部弥生　原　幸恵

嘱　　託　長棟紀子　根岸良子　酒井友子

調査補助員　寺内景子

作　業　員　石井悦雄　石川栄吉　尾川邦代　大根田幸子　川島範子　岸　貴子　小林浩子

坂田岩吉　高瀬　広　橋本晶郎

3. 調査に伴う経費は、国および県より補助を受け館林市が負担した。

4. 調査によって得た出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。

5. 本書のとりまとめは、岡屋英治、岡屋紀子が中心となり行った。

6. 遺跡名の後に付けた（ ）内の数字は館林市の遺跡番号である。

7. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関のご指導、ご教示、ご協力を賜りました。厚くお礼申しあげます。

〈目　　次〉

例　　言
目　　次
図版目次
写真目次
第Ⅰ章　館林市の環境 …… 1
第1節　地理的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 3
第Ⅱ章　各遺跡の概要 …… 5
第1節　新倉前遺跡（平10地点） …… 5
1．立地と環境 …… 5
2．調査の概要 …… 7
第2節　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点） …… 9
1．立地と環境 …… 9
2．調査の概要 …… 11
3．出土遺物 …… 13
第3節　伝右エ門遺跡（平10地点） …… 18
1．立地と環境 …… 18
2．調査の概要 …… 20
3．出土遺物 …… 22
第4節　笹原遺跡（平10地点） …… 24
1．立地と環境 …… 24
2．調査の概要 …… 26
3．出土遺物 …… 28
参考文献 …… 30
抄　　録 …… 31

〈 図 版 目 次 〉

第 1 図　館林市の位置図 …… 2

第 2 図　遺跡分布図 …… 4

第 3 図　新倉前遺跡周辺の遺跡 …… 6

第 4 図　新倉前遺跡（平10地点）調査区全体図 …… 8

第 5 図　高根・外和田遺跡・高根城跡周辺の遺跡 …… 10

第 6 図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）調査区全体図 …… 12

第 7 図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 1 …… 14

第 8 図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 2 …… 15

第 9 図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 3 …… 16

第10図　伝右エ門遺跡周辺の遺跡 …… 19

第11図　伝右エ門遺跡（平10地点）調査区全体図 …… 21

第12図　伝右エ門遺跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 …… 23

第13図　笹原遺跡周辺の遺跡 …… 25

第14図　笹原遺跡（平10地点）調査区全体図 …… 27

第15図　笹原遺跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 …… 29

〈 写 真 目 次 〉

写　真　1　新倉前遺跡全景 …… 5
写　真　2　新倉前遺跡（平10地点）調査前風景 …… 5
写　真　3　新倉前遺跡（平10地点）調査風景（重機） …… 7
写　真　4　新倉前遺跡（平10地点）調査風景（人力） …… 7
写　真　5　新倉前遺跡（平10地点）土層状態（8トレンチ） …… 7
写　真　6　新倉前遺跡（平10地点）完掘状態（10トレンチ） …… 7
写　真　7　高根・外和田遺跡・高根城跡全景 …… 9
写　真　8　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）調査前風景 …… 9
写　真　9　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）調査風景（人力） …… 11
写　真 10　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）土層状態（4トレンチ） …… 11
写　真 11　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）遺物出土状態（9トレンチ） …… 11
写　真 12　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）完掘状態（6トレンチ） …… 11
写　真 13　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物 (1) …… 17
写　真 14　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物 (2) …… 17
写　真 15　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物 (3) …… 17
写　真 16　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物 (4) …… 17
写　真 17　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物 (5) …… 17
写　真 18　伝右エ門遺跡全景 …… 18
写　真 19　伝右エ門遺跡（平10地点）調査前風景 …… 18
写　真 20　伝右エ門遺跡（平10地点）調査風景（重機） …… 20
写　真 21　伝右エ門遺跡（平10地点）調査風景（人力） …… 20
写　真 22　伝右エ門遺跡（平10地点）遺物出土状態（2トレンチ） …… 20
写　真 23　伝右エ門遺跡（平10地点）完掘状態（1トレンチ） …… 20
写　真 24　伝右エ門遺跡（平10地点）出土遺物 (1) …… 22
写　真 25　伝右エ門遺跡（平10地点）出土遺物 (2) …… 22
写　真 26　笹原遺跡全景 …… 24
写　真 27　笹原遺跡（平10地点）調査前風景 …… 24
写　真 28　笹原遺跡（平10地点）調査風景（重機） …… 26
写　真 29　笹原遺跡（平10地点）調査風景（人力） …… 26
写　真 30　笹原遺跡（平10地点）土層状態（4トレンチ） …… 26
写　真 31　笹原遺跡（平10地点）完掘状態（2・5トレンチ） …… 26
写　真 32　笹原遺跡（平10地点）出土遺物 …… 28

第I章　館林市の環境

第1節　地理的環境

館林市は、関東地方のほぼ中央部、関東平野の北辺に位置する人口8万人弱の地方都市で、群馬県でいえばその南東部、「鶴舞う形の群馬県」のちょうど頭の部分に位置している。

山国「群馬」にあって、「邑楽・館林」地方はほとんど平坦な地域で、その区域は利根川・渡良瀬川という両大河に挟まれるようにしてあり、群馬県、栃木県、埼玉県、茨城県、千葉県の接する地域にも近い。

市域は東西約１５km、南北８km、総面積６１k㎡ほどで、南は邑楽郡明和町をはさみ、利根川を隔て埼玉県、北は渡良瀬川を隔て栃木県、東は邑楽郡板倉町をはさみ、遊水池を隔て茨城県となる。

本市と主要都市とのつながりは、県都「前橋」までは約５０km、首都圏とは東北自動車道で約６０kmの距離にある。

次に市内の地形を概観してみると、館林市の地形は大きく、「低台地」と「低地帯」に分けられ、市域のちょうど中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺には「低地帯」が広がる。

市内の標高は最高32m、最低15mほどで、「低台地」は、ほぼ標高20mの等高線をトレースするように見える。この標高20m前後の「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地で、主に下末吉期と呼ばれる古東京湾の時代の堆積物によって構成されており、関東ローム層によって覆われ、西から東へ緩やかに傾斜している。

「邑楽・館林台地」の西辺にそって埋没河畔砂丘が、太田市古海から、館林市高根町まで延びている。

この内陸河畔砂丘は、幅約500mの馬背状の高台で、「邑楽・館林台地」より一段高くなっており、市内の最高標高はこの内陸河畔砂丘上にある。

また「低台地」にそって、一段低いテラス状の微高地が存在する場合あり、特に台地の北側に目立つ傾向にある。

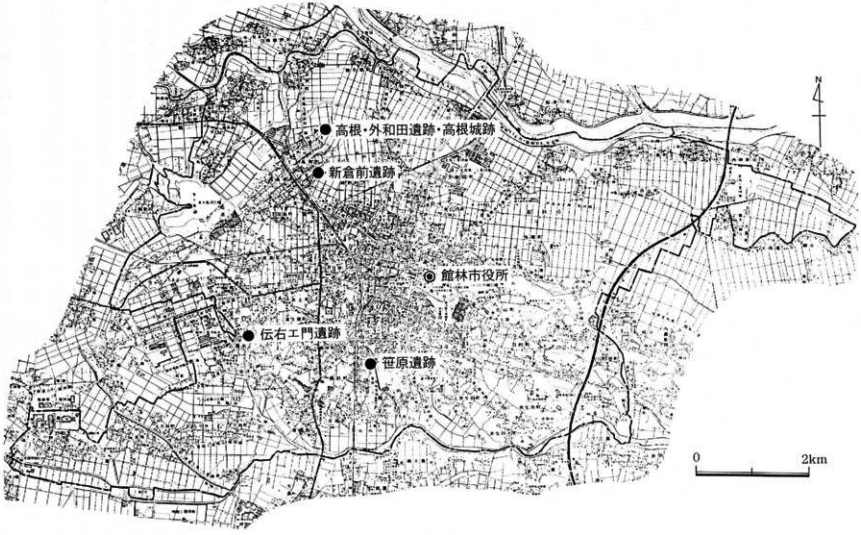
低台地の北と南には標高15mほどの低地帯が広がり、これは、おおむね利根川・渡良瀬川の形成した「沖積低地」である。台地北の低地帯は渡良瀬川を中心とした河川が、南は谷田川・利根川を中心とした河川が形成したもので、北の沖積低地には旧河道、自然堤防、微高地などが目立ち、南の低地帯には池沼や湿地帯が発達している。

「低台地」と「低地帯」の比高差は平均して5m程度である。台地から低地へ移行する線は、台地の北と南で違いを見せる。北側の台地は、あまり侵食されておらず崖線を作って、一気に低地に移行する場合が多く、台地から一段低いテラス状の微高地へと移り、段をもって低地に移行する傾向もみられる。

台地の南側は良く侵食され、複雑に沖積地に移行することが多い。大きな谷頭や支谷が発達し台地の深くまで入り込んでおり、その先端はさらに樹枝状に分れ複雑になっている。

こうした谷は出口で堰き止められ「蛇沼」「茂林寺沼」「近藤沼」などをはじめとする池沼や湿地を形成することが多く、本市の特色のある景観を示している。

本市域は、関東構造盆地のほぼ北辺に位置しており、この構造盆地運動が、本市の南側の低台地と低湿地の境界線を複雑にしている一要因と考えられている。



第1図　館林の位置図

第2節　歴史的環境

「館林市の遺跡」（市内遺跡詳細分布調査報告書）には144ヶ所の遺跡が登載されており、その多くが「邑楽・館林台地」と呼ばれる標高20m前後の低台地上に分布している。

市内に所在する遺跡を、遺跡分布調査による採取遺物から各時代に大別してみると、複合遺跡があるものの、旧石器時代の遺跡が3遺跡、縄文時代の遺跡が13遺跡（縄文土器のみを採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0遺跡（弥生時代の遺物を採取できた遺跡は1遺跡）、古墳時代から平安時代の遺跡は96遺跡（内23遺跡は縄文時代の遺物も採取）、古墳は17遺跡（古墳総数は25基）、中世生産址が1遺跡、中世城館址が12遺跡、近世城館址が2遺跡となる。

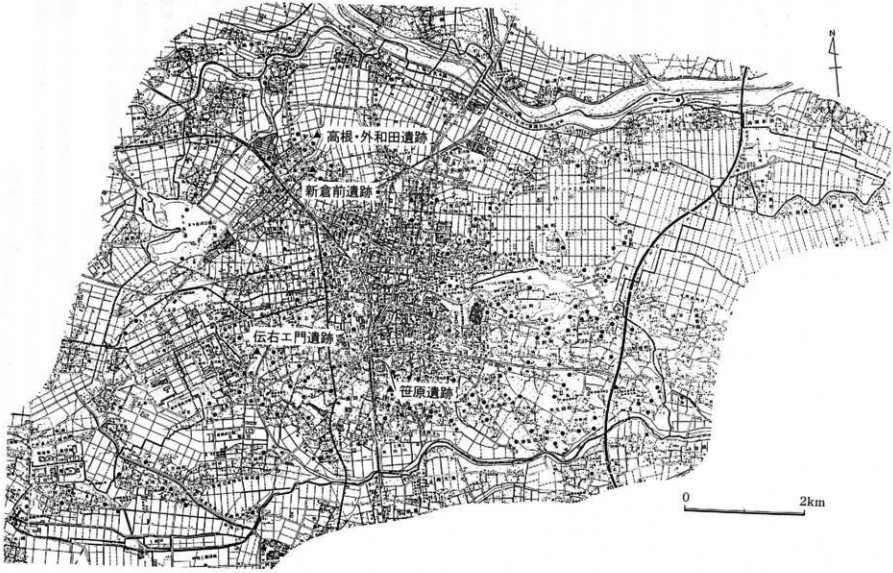
これらの遺跡の分布について時代的変遷を地形との関わりのなかで概略してみると、旧石器時代の遺跡は、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）などの市内でも標高の高い地域に集中する傾向がある。縄文時代の遺跡は遺跡数自体も多くなるが、前期と中期の遺跡の数が多く、これらは池沼や谷地を望む舌状の台地上の平坦面に所在する傾向をもつ。後期から晩期にかけて遺跡数は減ってくるばかりでなく台地の斜面や微高地に所在する傾向があり、遺物包含層などは低地（沖積地）に及ぶことがある。弥生時代の遺跡は少なく、遺物がわずかに確認されるのみである。古墳時代の遺跡は前期の遺跡が少なく、その立地は台地斜面からテラス状の微高地に所在する。中期になると遺跡数も増えるとともに、斜面から台地上に、後期は数も中期より増え、台地上の平坦部へと移行していく傾向が見られる。古墳は現在全部で25基ほど残存しているが、古墳群が2ヶ所ある。単独のものも多いが、そのいずれも谷や湿地を見下ろす高台部分に造られている。奈良・平安時代の遺跡はその数が急増するばかりでなく、台地の内部や全面にも広がるとともに、自然堤防上にも見られるようになる。平安時代以降は台地上に普遍なく集落が営まれてきたようである。

こうした傾向は、単に遺跡と地形のみの関わりだけでなく、自然環境の変化にも関わっているものと考えられ、時代別の遺跡立地の高低の移動は、茂林寺沼や蛇沼などで行われたボーリング調査などの環境の変遷データにもよく合致している。

こうしたなかで、これまでに、発掘調査などにより住居址などの遺構を確認できた遺跡は15遺跡（複合遺跡を1と数える）、遺物が多く出土した遺跡は8遺跡（同上）ある。住居址などの遺構が確認できた遺跡は、縄文時代のもの4遺跡（大袋Ⅱ遺跡、間堀遺跡、加法師遺跡、岡野・屋敷前・岡遺跡）、弥生時代のもの1遺跡（道満遺跡）、古墳時代のもの11遺跡（大袋4遺跡、大袋城跡、高根・外和田遺跡、岡野・屋敷前・岡遺跡、八方遺跡、尾曳町1遺跡、大道北遺跡、北近藤第一地点遺跡、伝右エ門遺跡、南近藤遺跡、道満遺跡）、奈良時代のもの1遺跡（南近藤遺跡）、平安時代のもの3遺跡（北近藤第一地点遺跡、道満遺跡、下堀工道満遺跡）である。また、遺物の多く出土した遺跡として、旧石器時代の遺物が出土した遺跡が5遺跡（水溜第一地点遺跡、同第二地点遺跡、大袋Ⅱ遺跡、大袋Ⅰ遺跡、山神脇遺跡）、縄文時代前期の遺物が出土したもの1遺跡（大袋Ⅰ遺跡）、縄文時代中期の遺物が出土したもの1遺跡（笹原遺跡）、同時代後・晩期の遺物が出土した遺跡が2遺跡（大原道東遺跡、上の前遺跡）ある。

古墳については、昭和10年刊行の「上毛古墳綜覧」に館林市内で67基の古墳が記されているが、現在市内に残る古墳は25基と半数以下となっており、調査されずに破壊された古墳も多く、これまでに調査され埋葬施設が確認できた古墳は天神二子古墳と渕ノ上古墳の2基のみである。

中世城館址の実態については、いずれも伝説的な要素が多く明確ではない。



第2図　遺跡分布図

第Ⅱ章　各遺跡の概要

第1節　新倉前遺跡（平10地点）

1．立地と環境

新倉前遺跡（14）は、館林市の北西部、東武鉄道佐野線「渡瀬駅」の西方約1.5kmの所に所在する奈良時代～平安時代の遺物が採取される散布地である。遺跡名は中心となる小字名から「新倉前遺跡」とした。

遺跡は、「邑楽・館林台地」の北西縁に位置し、「邑楽・館林台地」の西縁に添って南北に延びる内陸河畔砂丘が北端で二つに別れ、この南側の河畔砂丘に連なる洪積台地上にあり、標高は25mほどある。

遺跡の載る洪積台地は、北に渡良瀬川の形成した沖積低地と比高5mほどの崖線を作っている。この洪積台地は、崖線部分が最も標高が高く、南に向かって傾斜しており、その中に、幾つかの小谷があると思われる。

遺跡周辺は、地形がやや複雑で遺跡の北側には支谷の狭い谷があり、その北側は緩やかに高くなっているが、南側は緩やかに傾斜して比較的大きな谷へと移行する。

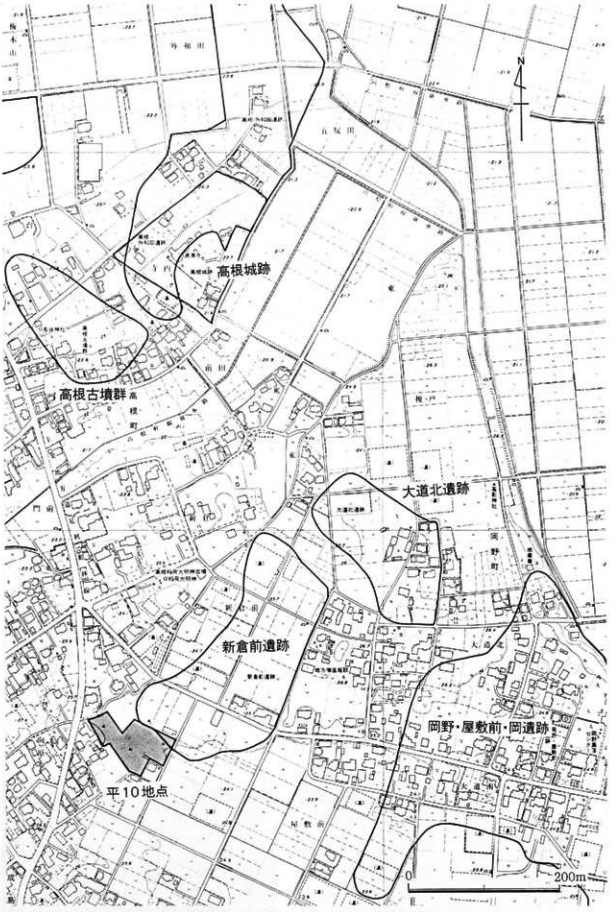
調査地は遺跡の南部分を一部含み遺跡に接する部分であり、南に向かって緩やかに下がって行く地点で、現状は荒れ地となっていた。

新倉前遺跡の周辺の遺跡としては、西側の内陸河畔砂丘上に、旧石器時代の遺物が調査された山神脇遺跡(8)、縄文時代の土器片や土師片が採取される小蓋林遺跡(7)、梅木山遺跡(9)のほか、縄文時代の遺物や古墳時代などの住居址、古墳（天神二子古墳）が発掘調査された高根・外和田遺跡(11)、5基の古墳が残る高根古墳群(10)及び高根稲荷大明神古墳(15)の古墳群、中世の城館址と考えられている高根城跡(12)がある。また、本遺跡と同じ洪積台地上の東側には、縄文時代及び古墳時代～平安時代の遺物などを採取できる岡野・屋敷前・岡遺跡(16)が広がり、北側には古墳時代の住居址などが調査された大道北遺跡(13)がある。

旧河道と考えられている大きな谷を隔てて東側の高台には古墳時代の集落址である八方遺跡(18)が、その北には中世の城館址と伝えられる蛇屋敷跡(17)が、小谷をへだてて南側の館林台地本体には、縄文時代後期の土器が出土した大街道遺跡(31)、縄文土器の出土が見られる朝日町遺跡(34)のほか愛宕神社古墳(32)、平安時代の遺物が採取される二ツ塚遺跡(28)があり、さらにこの台地には、江戸時代の館林城の城下町（33）が広がっている。

写真1　遺跡全景

写真2　調査前風景（平10地点）



第３図　　新倉前遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

本地点の発掘調査は、社会福祉法人「宝寿会」の館林市岡野町字新倉前335－1,2,3高根町字新倉262－3,9 263における社会福祉施設（特別老人ホーム）建設に伴う試掘・確認調査である。

新倉前遺跡は、遺物散布地であるとともに、建設計画地が遺跡に係る部分がわずかで周辺地であったため、当初は工事に先立つ立ち会い調査によって対応する方向であった。しかし、工事直前に開発申請者より、工事中に遺構や遺物などが確認され工事中断になると困ることから、事前に遺構などの有無を確認して欲しい旨の申し出があり、これまで同遺跡周辺での調査例もないことから、計画予定地の試掘・確認調査を行うこととなった。

調査は、開発予定区域全体に6m間隔を基本に、16本のトレンチを設定（調査区の西側より1～16トレンチ）し、重機による表土除去を行い、その後、人力により掘り下げ、土層の観察を行うとともに、遺構や遺物の確認を行った。

表土除去の結果、調査区の西側（1トレンチ側）では地表面下約80cmで、東側（16トレンチ側）では、約50cmでローム面を確認した。

調査区の旧地形は、調査区の北側から南に向かって全体的に緩やかに傾斜し、東西方向では東側がやや高く、西側に向かって緩やかに傾斜し、東はかなり急に落ち込み東の谷に続くものと考えられ、調査区は台地の末端であるとともに、比較的小さな高まりであることを予想させた。

また、調査区全体にはすでに砕石が敷かれているとともに、各トレンチにおいても近年の攪乱が入っている様子が観察された。

その後、遺物や遺構確認のため、各トレンチのローム面の精査を行うとともに、掘り下げを行ったが住居址などの遺構は確認されなかった。

出土遺物は、土師器や陶磁器などがあるが、数は少なかった。

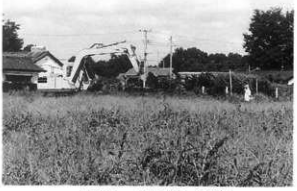
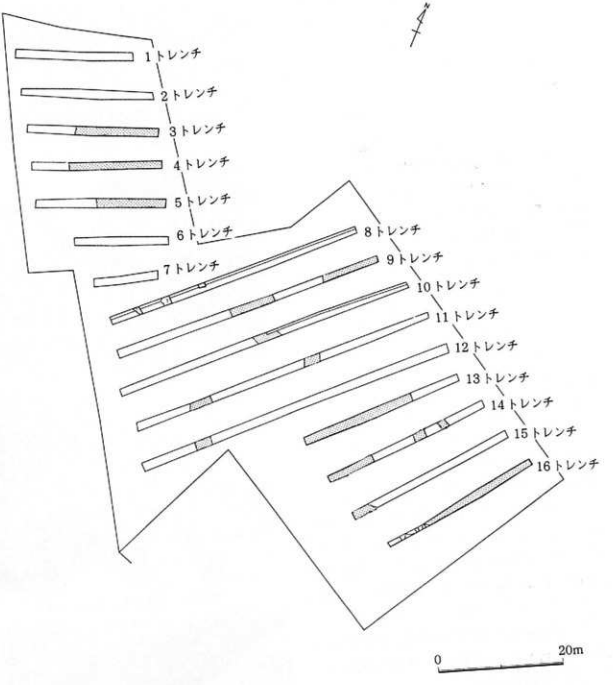


写真3　調査風景（重機）

写真4　調査風景（人力）

写真5　土層状態（8トレンチ）

写真6　完掘状態（10トレンチ）



第４図　新倉前遺跡（平１０地点）調査区全体図

第2節　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）

1．立地と環境

高根・外和田遺跡（11）高根城跡（12）は館林市の北西部、東武鉄道佐野線「渡瀬駅」の北西約1.5kmのところに所在する。

本遺跡は、縄文時代及び古墳時代～平安時代の遺物を出土し、古墳時代中期などの住居址が発掘調査されている高根・外和田遺跡と、中世の城館址として伝承されている高根城跡が一部複合している遺跡で、昭和37年に発掘調査された天神二子古墳も本遺跡内に所在した。

遺跡名は「高根・外和田遺跡」としたが、以前は「高根遺跡」「外和田遺跡」と別呼称されていた。「館林の遺跡」刊行に際した分布調査で二つの遺跡範囲がつながったことから一つの遺跡名とした。

「邑楽・館林台地」の西縁に添ってある内陸河畔砂丘は、北端部で二股に分かれるが、本遺跡は北側の河畔砂丘上から、一段低くなるテラス状の微高地に広がり、渡良瀬川の形成した沖積地を北及び西に望んで立地している。また、遺跡の東は南側の河畔砂丘と隔てる広く深い谷となっており、その谷幅は250mほどある。遺跡周辺の標高は、最も高い内陸河畔砂丘上で26mほど、テラス状の微高地で23mほどで、周辺低地との比高差は1～5mほどである。

本遺跡周辺に所在する遺跡は多く、本遺跡同様の内陸河畔砂丘上に、旧石器時代の遺物の出土した山神脇遺跡（8）、縄文時代の土器や土師器の散布が見られる小薑林遺跡（7）や梅木山遺跡（9）のほか、現在も5基の古墳の残る高根古墳群（10）、高根稲荷大明神古墳（15）などが上げられ古墳の多く所在した地域で、前述の天神二子古墳（100m級の前方後円墳）も同じ河畔砂丘上にある。

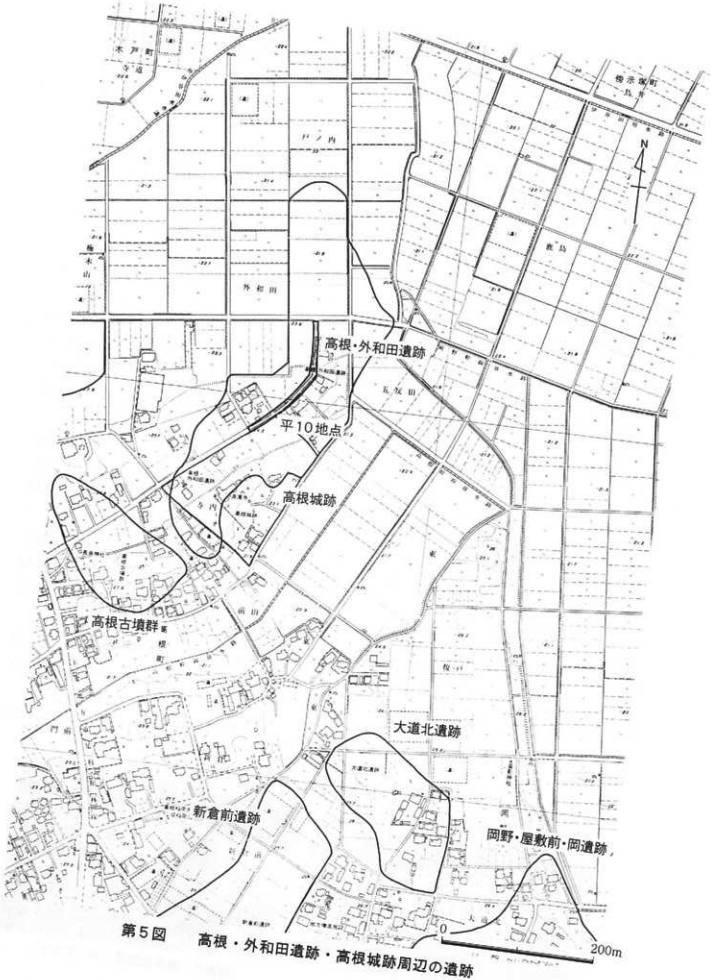
また、内陸河畔砂丘から東南に連なる洪積台地上には、奈良～平安時代の遺物を散布する新倉前遺跡（14）や古墳時代の住居址などが発掘調査された大道北遺跡（13）、縄文時代～平安時代までの遺物の採取される岡野・屋敷前・岡遺跡（16）が広がり、これらの台地と旧河道を隔て東に古墳時代の集落である八方遺跡（18）や中世城館址と伝えられる蛇屋敷跡（17）などが所在する。

また小支谷を隔てた南の台地上には縄文時代の遺物の出土した大街道遺跡（31）や朝日町遺跡（34）、古墳である愛宕神社古墳（32）、平安時代の遺物を散布する天神遺跡（29）などがあり、江戸時代の館林城の城下町（33）もこの台地上に広がっていた。

調査区域はこの内陸河畔砂丘の尾根からテラス状の微高地にかけてで、現状では畑や水田となっていた。

写真7　遺跡全景

写真8　調査前風景（平10地点）



第5図　高根・外和田遺跡・高根城跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

本地点の発掘調査は、館林市の計画した館林市高根町字外和田1964－2 他14筆における農道4号線の拡幅工事に伴う試掘・確認調査である。今回の工事は、農道4号線が現状で幅員2mほどの道路であるとともに、先端が行き止まりとなっており、地元の強い要望もあって幅員を拡幅するとともに先の市道まで開通させるものとして計画されたものである。

調査は、工事が道路拡幅であり、現道は生活道路として利用されていることから、拡幅予定地及び新設予定地部分の現況に合わせ10本のトレンチを設定（台地上から1～10トレンチ）し、人力により表土を排除、地下の状況や遺物、遺構の有無などを確認したものである。

尾根上の1～4トレンチでは表土下100cm掘り下げてもローム面に達しなかった。尾根からやや斜面に向かう5～7トレンチは、表土下60cmほどで、8トレンチでは表土下10cmほどでローム面を確認した。一段下がったテラス状の微高地である9～10トレンチでは、表土下30cmほどでローム面となった。現状では、遺跡の北部分で比高差5mほどで崖状に低いテラス状の微高地となるが、旧地形は緩やかに移行していた様子が予想された。

9トレンチでは、ローム面で黒色土の落ち込みを確認したため、精査したところ、縄文土器の一括個体などが出土するとともに、一部壁状のものが確認できたことから、住居址などの遺構と考えられたが、隣地には住宅があるとともに、大半は調査区外となるため拡張はしなかった。

台地上の1～4トレンチでは、表土下100cmでもローム面が確認できなかったことから、ボーリングステッキにより探査をおこなったところ、さらに50cm以上の堆積土があることが確認できた。かつて付近に天神二子古墳などの大型古墳が所在していたことから、この区域はこの古墳の周堀である可能性もある。

写真9　調査風景（人力）

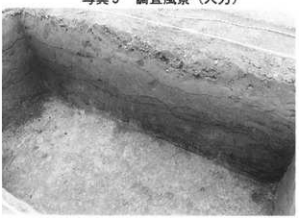
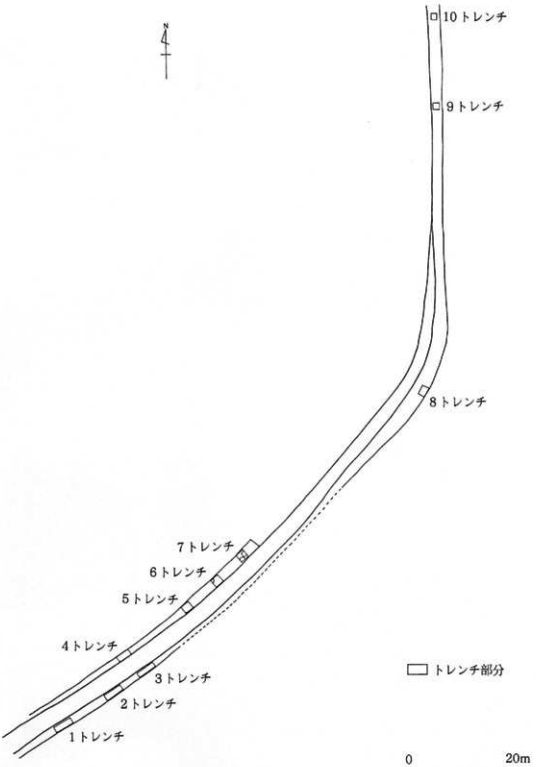


写真10　土層状態（4トレンチ）

写真11　遺物出土状態（9トレンチ）

写真12　完掘状態（6トレンチ）



第６図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平１０地点）調査区全体図

3．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は多い。台地上のトレンチでは縄文土器を中心にしながら、埴輪や土師器、須恵器の出土が見られる。また、テラス状の微高地のトレンチからは縄文土器の出土が多い。

① 土　器

1は、縄文土器の深鉢一括個体である。底部と把手の一部を欠損している。

口縁部付近はまっすぐに立ち上がり、2つのブリッジ状の把手を有し、頸部は内湾して緩やかにすぼまり胴部へと続く。胴部はキャリパー状。口径16.5cm、最大径20.0cm、現高26.5cmを測る。

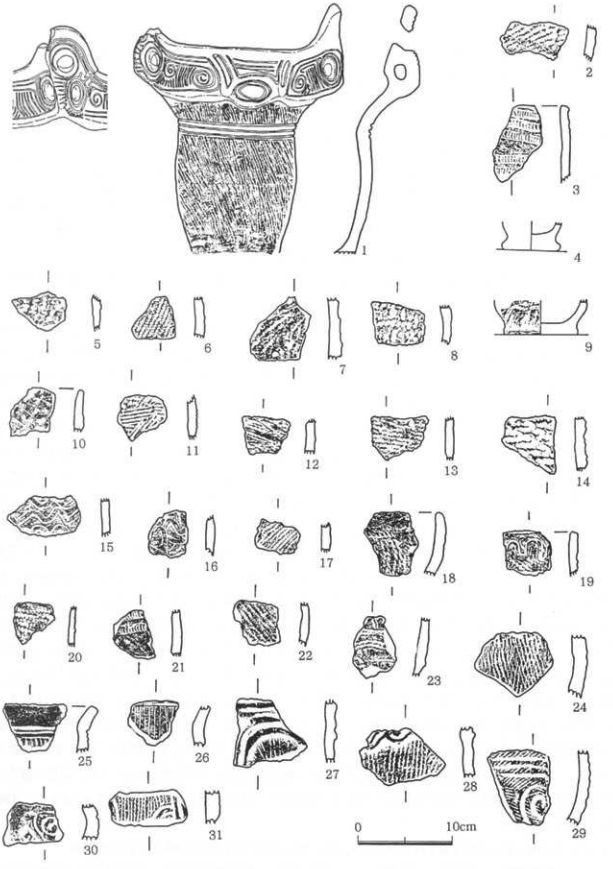
口縁部は隆帯と把手で二区画し、さらに各区画を3つに区画し、渦巻きと平行沈線を中心とした文様を描いている。頸部以下の地文に撚り糸状の縄文を施し、その上からくびれ部に3条の沈線を廻している。

焼成良好。胎土に小砂を多量に混入する。色調は暗褐色。9トレンチから出土している。

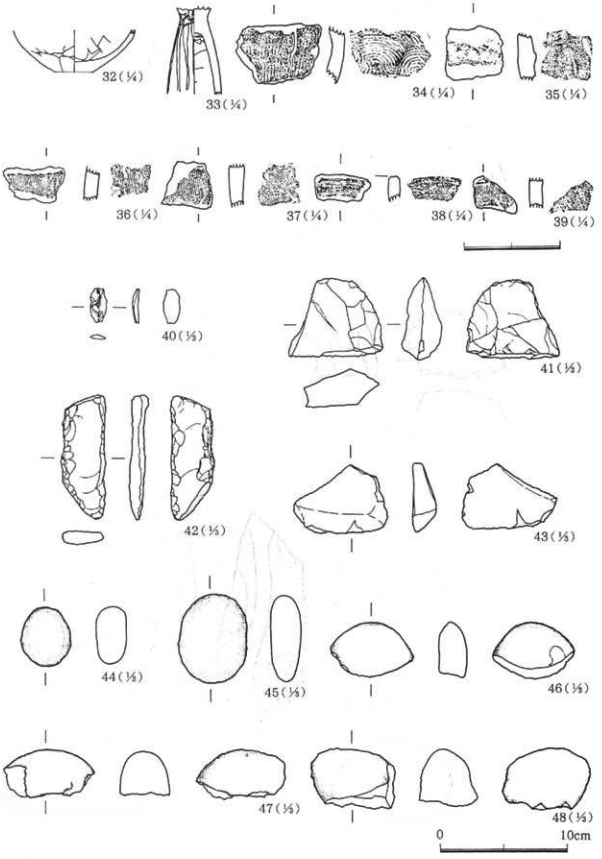
2は、深鉢の胴部破片。焼成良好。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状である。表面に縄文。3は、深鉢の口縁部破片。焼成は良好。胎土に繊維を含む。表面に半裁竹管による爪形文。4は、深鉢の底部破片。底径5.8cm、現高2.9cmを測る。胎土に繊維を多量に混入しもろい。5は、深鉢の胴部破片。胎土に多量に繊維を含み、断面はサンドイッチ状になっている。表面に撚りの甘い縄文。6は、深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含まず小砂が多量混入。表面にしっかりとした縄文。7は、深鉢の底部付近の破片。胎土に多量の繊維を混入。表面に撚りのやや甘い縄文。8は、深鉢胴部破片。胎土に多量の繊維、表面は撚りの甘いループ文。9は、深鉢の底部破片。底径7.8cm、現高3.6cmを測る。胎土に多量の繊維混入。表面に2本単位の回転押捺の縄文。10は、深鉢口縁破片。胎土に繊維を含む。表面に格子状の沈線、地文に縄文を転がす。11は、深鉢胴部破片。焼成良好。胎土に繊維を含まず、地文の縄文の上に竹管による格子状の平行沈線文。12は、深鉢の胴部破片。繊維を含む。文様は2本単位の回転押捺の縄文。13は深鉢胴部破片。焼成良好。胎土に繊維。表面に縄文。14は、深鉢の胴部破片。胎土に繊維を多く含む。表面に撚りの甘いループ文。15は、深鉢胴部破片。胎土に小砂、繊維を含む。波状の沈線文。16も深鉢の胴部破片である。繊維を多量に混入し、表面に波状の沈線を施す。17も深鉢の胴部破片。繊維混入。表面に縄文。18は口縁破片。胎土に繊維を多量に含む。表面に甘い縄文。19は、深鉢の口縁破片。口唇部は二重。繊維混入。口縁部に波状の平行沈線、胴部に縄文。20は、深鉢胴部破片。繊維混入。しっかりした縄文。21は、深鉢胴部破片。胎土に繊維。半裁竹管の爪形文。22は、深鉢胴部破片。繊維含む。表面に縄文。23は、深鉢胴部破片。繊維混入。2本単位の回転押捺の縄文。24は、深鉢胴部破片。胎土に小砂多量混入。表面に撚り糸状の縄文。25は、口縁部破片。金雲母、粗砂混入。文様は口縁部周辺は無文、頸部に竹管による沈線。26は深鉢の胴部破片。金雲母、粗砂多量混入。隆帯を中心に沈線を施す。27は深鉢の胴部破片。小石、金雲母混入。沈線。28は、深鉢胴部破片。金雲母混入。隆帯と沈線、胴部は撚り糸状の縄文。29は、深鉢の胴部破片。粗砂混入。地文に縄文。沈線による渦巻き文。30は、胴部の破片、粗砂混入。隆帯の上を刺突、沈線の渦巻き。31は、胴部破片。砂多量混入。地文に撚り糸状の縄文。沈線による渦巻き文を施す。

2～5、7～10、12～23は縄文時代前期、6、11、24～31は縄文時代中期の土器群である。

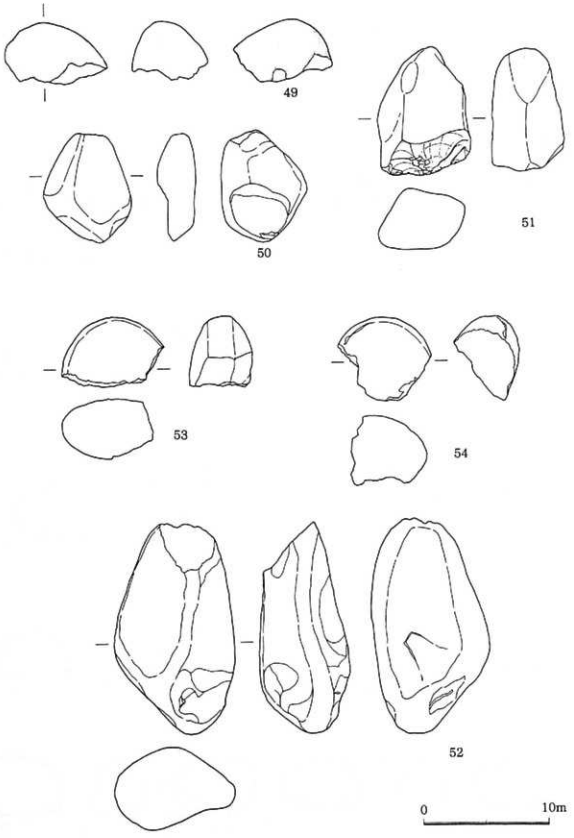
32は、甕底部破片。底径4cm、現高4.3cm、焼成良好。小砂を多量に含む。成形は表面及び底部はヘラ削り、内面は指ナデ。33は、高坏脚部破片。くびれ部の径2.8cm、現高9cm。成形は内外面ともヘラ削



第７図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物実測図及び影拓 1



第８図　高根・外和田遺跡・高根城跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影 2



第９図　　高根・外和田遺跡・高根城跡（平１０地点）出土遺物実測図及び拓影 ３

り、内面ヘラナデ。３４は、須恵器甕胴部破片。表は直線、内面は円紋のタタキ目。３５～３９は、円筒埴輪の破片。いずれもハケ目成形、３５には表にタガの跡が残る。

②石　器

４０～５４は、石器である。４０は、フレイク、チャート製。４１は、打製石斧と考えられる。先端部を欠損している。砂岩質の石材を使用し表裏面から調整している。４２は、フレイク？。砂岩質の剥片の両側に調整痕が見られる。４３は砥石。凝灰岩質の石を使用、表面は扁平になっている。下面に矢柄研磨の痕が残る。４４は磨石の完形品。砂岩質の石を使用。良く磨られ、表面及び裏面とも扁平で小さくなっている。４５は、磨石の完形品。砂岩質の石を使用。形状はコロッケ状を呈し、表裏面とも良く磨られ扁平になっている。４６は、磨石の破片。砂岩質の石を使用。良く磨られ、扁平になっている。４７～４９は、磨石の破片。５０は、敲石である。凝灰岩質の扁平な円礫を利用。一部に欠けた痕が残る。５１は、敲石である。砂岩質の石を利用。下部欠損。上部は良く敲かれた使用痕がみられる。５２は、敲石、素材は凝灰岩質の扁平な円礫。頭部分が欠けている。５３～５４は磨石の破片である。

写真13　出土遺物(1)

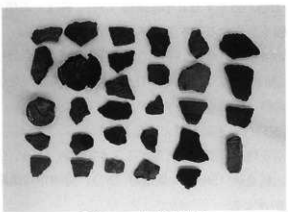


写真14　出土遺物(2)

写真15　出土遺物(3)

写真16　出土遺物(4)

写真17　出土遺物(5)

第3節　伝右エ門遺跡（平10地点）

1．立 地 と 環 境

伝右エ門遺跡（52）は、館林市の南西部、県立「館林高校」の南西約1kmのところ、近藤沼の北側に所在する縄文時代・古墳時代の遺物を出土する集落址で、古墳時代中期の住居址が発掘調査されたことが、館林市誌に報告されている。

遺跡名は所在する小字名から「伝右エ門遺跡」とした。

遺跡は、近藤沼から北に向かって深く入り込む谷（近藤川・現在は鶴生田川放水路）を南に望む洪積台地の南斜面に広がり、遺跡周辺の標高は21mほどで、現在の谷との比高差は2mほどある。

遺跡周辺は、工業団地などの造成に伴って、地形を大きく変化してきているが、遺跡の近隣にはまだ雑木林や畑地が残っている。

調査地は遺跡の南西部分にあたり、現況では畑及び竹藪となっていた。

近藤沼からの谷は、「邑楽・館林台地」を深く侵食し、谷の先端部は樹枝状になっており、多くの舌状台地を作りだしており、この舌状台地上には多くの遺跡が所在している。

本遺跡をはじめ、近藤沼を取り巻く高台に所在する遺跡は多い。

本遺跡同様に、近藤沼から北に延びる谷が形成する舌状台地上に所在する遺跡として、谷の西岸側には、北に縄文時代や古墳時代の遺物を散布する近藤障子遺跡（51）、南に古墳時代の集落址である北近藤第一地点遺跡（53）が、谷を隔てた対岸には、北から縄文時代の遺物が散布する北小袋遺跡（54）、縄文・古墳・平安時代の遺物が散布する小袋遺跡（55）、平安時代の遺物を散布する苗木西遺跡（94）が所在する。

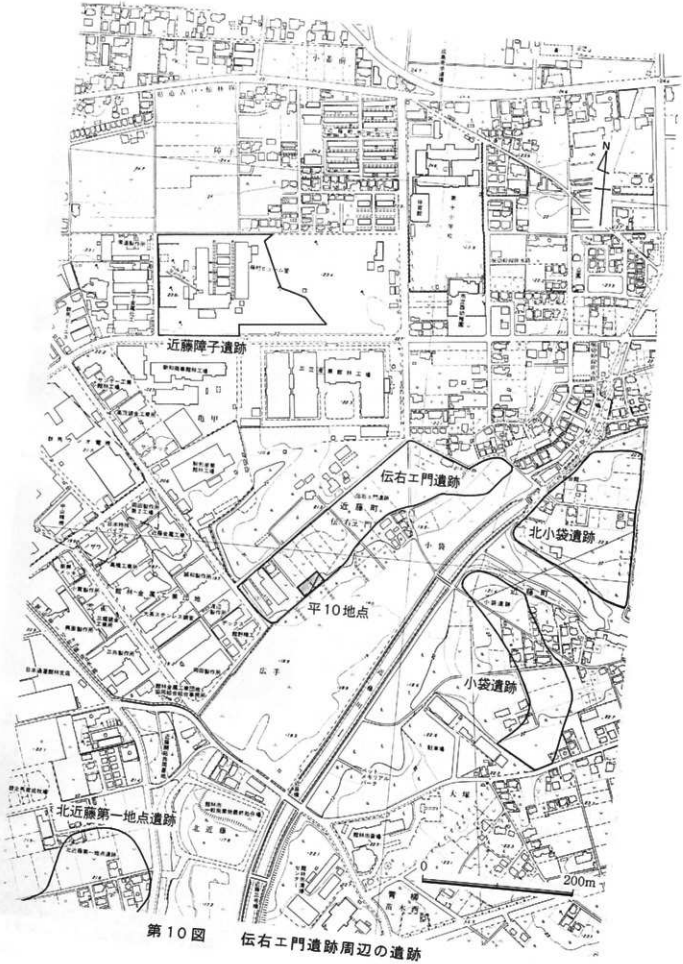
また、近藤沼を望む北側の高台には、東側に縄文時代や古墳時代の遺物が採取できる萩原遺跡（98）や、古墳時代～平安時代の遺物が散布する苗木遺跡（95）が、西側には、古墳時代の住居址などが発掘調査された南近藤遺跡（91）、土師器が出土する北近藤第二地点遺跡（92）が所在する。

このように、近藤沼を中心とした地域には古墳時代～平安時代の遺跡が多く所在している。

このほかにも、本遺跡周辺の遺跡としては、縄文時代～平安時代の遺物が散布する二本松遺跡（50）、奈良時代～平安時代の遺物が採取できる中島遺跡（56）、清水橋遺跡（58）、大塚遺跡（57）、青柳中島遺跡（96）が、近世の城館址と伝えられる近藤陣屋跡（97）が所在する。

写真18　遺跡全景

写真19　調査前風景（平10地点）



第10図　伝右エ門遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

本地点の発掘調査は、地権者柘植龍夫氏によって計画された、館林市近藤町字伝右エ門2899－149,150における露天駐車場整備に伴う、試掘・確認調査である。

同地は、伝右エ門遺跡の西側の一部であるとともに、本遺跡では、かつて古墳時代の住居址が発掘調査されており、同時代の集落址であったことが確認されていることから、工事着手前に、地下の状況、遺物や遺構の有無の確認を行う必要があるものと考えられ、試掘・確認調査を行うこととなった。

調査は、計画区域内に6m間隔を基本に6本のトレンチ（東より1～6トレンチ）を設定し、重機により表土を排除し、その後、人力により掘り下げ、土層の確認を行うとともに、平面精査を行い遺物・遺構の有無を確認した。

表土を排除した結果、調査区域の北側では地表下約20cmのところで、南側では地表下約60cmのところでローム面を確認し、旧地形は、北の高台から南の低地に向けて緩やかに傾斜していることが確認された。

調査区域では、全体的に耕作による削平や立木の根などによる撹乱が多く、遺構と明確に判断できるものの確認はできなかったが、2トレンチ中央では不定形の落ち込みと焼土を確認した。

焼土と落ち込みの性格を明確にするため、落ち込みを掘り下げたところ、一括土器（坏）の出土が見られたことから、サブトレンチなどを掘るとともに周辺の土層状況の観察と平面プランなどの確認に務めたが、遺構としての平面形や、立ち上がりを明確にできなかったため、周辺の拡張は行わなかった。

出土遺物には、前述の一括土器のほか、土師器の破片、石器などの出土が見られた。

写真20　調査風景（重機）

写真21　調査風景（人力）

写真22　遺物出土状態（2トレンチ）

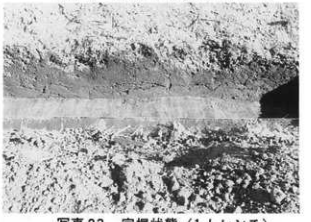
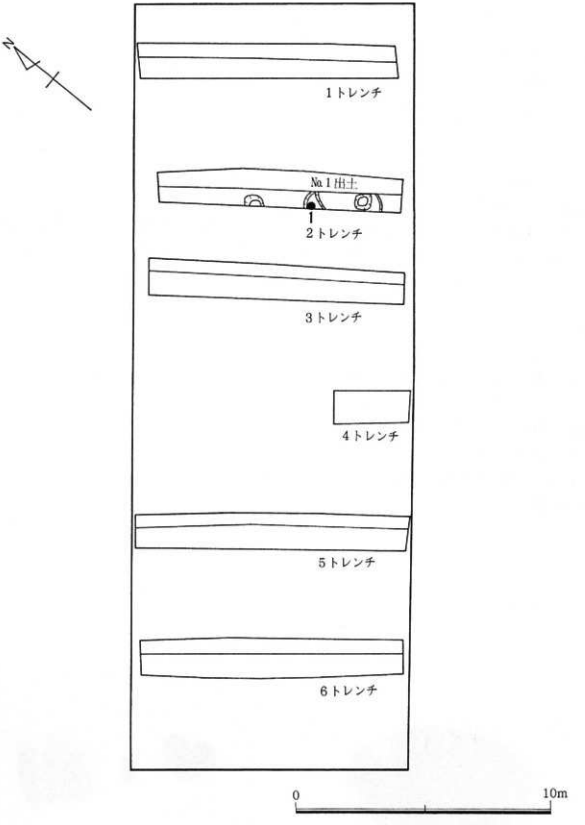


写真23　完掘状態（1トレンチ）



第11図　伝右エ門遺跡（平10地点）調査区全体図

3．出　土　遺　物

次に本地点で出土した遺物を挙げる。

本地点で出土した遺物には、土師器の一括個体、土師器破片、石器などがあるが、実測などが可能であったものは次の通りである。

①土　器

1は、土師器の一括個体である。2トレンチの焼土に伴う落ち込みより出土している。

ほぼ完形で、口径13.7cm、最大径14.1cm、器高3.6cmを測る。

器形は、口縁部がやや内湾し、肩部に最大径を持ち、緩やかに膨らんで底部に至る。器厚0.5cm程度。焼成は良好であるが、胎土に粗砂粒や小石を多量に含みややもろい。色調は、赤褐色を呈する。

調整は、口縁部周辺は指ナデ、胴部の表面はヘラ削り、内面は指ナデである。

②石　器

2は、フレイク。

チャートの剥片で、表面は自然面を多く残す。

3は、フレイク。

2と同じくチャート製。

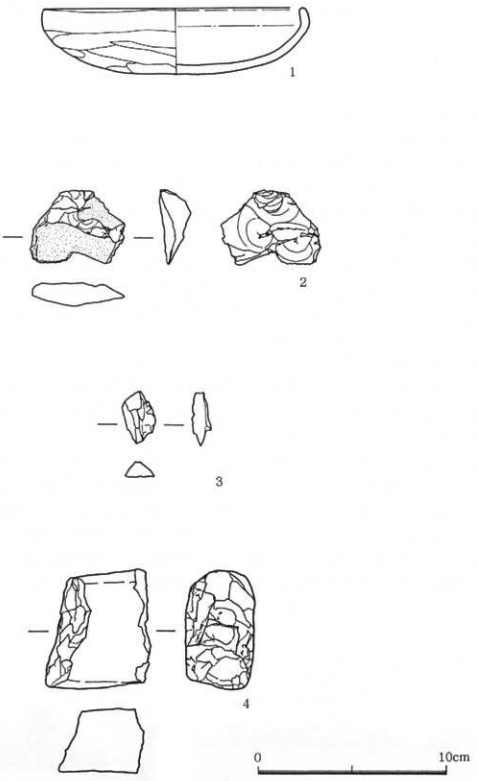
4は、石核か？

チャートの扁平な円礫の両端から剥片を打ち出している。

2及び3の母岩か？

写真24　出土遺物(1)

写真25　出土遺物(2)



第12図　伝右エ門遺跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影

第4節　笹 原 遺 跡（平10地点）

1．立 地 と 環 境

笹原遺跡（101）は、館林市の南部、東武伊勢崎線「茂林寺前」駅の北東約700mの所に所在する縄文時代及び平安時代の遺物を出土する遺跡である。遺跡名は中心となる遺跡の小字名から「笹原遺跡」とした。

遺跡は、「邑楽・館林台地」の南縁を深く浸食する「茂林寺沼」の谷を東に望む斜面から高台に位置し、標高は19mほど、現在の低地面からの比高差は2mほどある。

遺跡周辺は雑木林などが広がっているが、最近宅地化が目立ってきている地域でもある。調査地は一部宅地、大半が畑地となっていた。

茂林寺沼の谷は、「邑楽・館林台地」の南縁を深く浸食し、その先端は分かれて樹枝状となり、多くの舌状台地を作りだしており、この台地上に多くの遺跡が所在している。

茂林寺沼の谷を取り巻く遺跡には、本遺跡同様、谷の西岸に、平安時代の遺物を散布する法正谷遺跡（102）、中山東遺跡（103）、前通遺跡（104）が所在し、東岸には、縄文時代から平安時代の遺物を散布する腰巻遺跡（107）、美園町遺跡（106）、咄戸遺跡（108）、下堀工道満遺跡（105）が所在する。

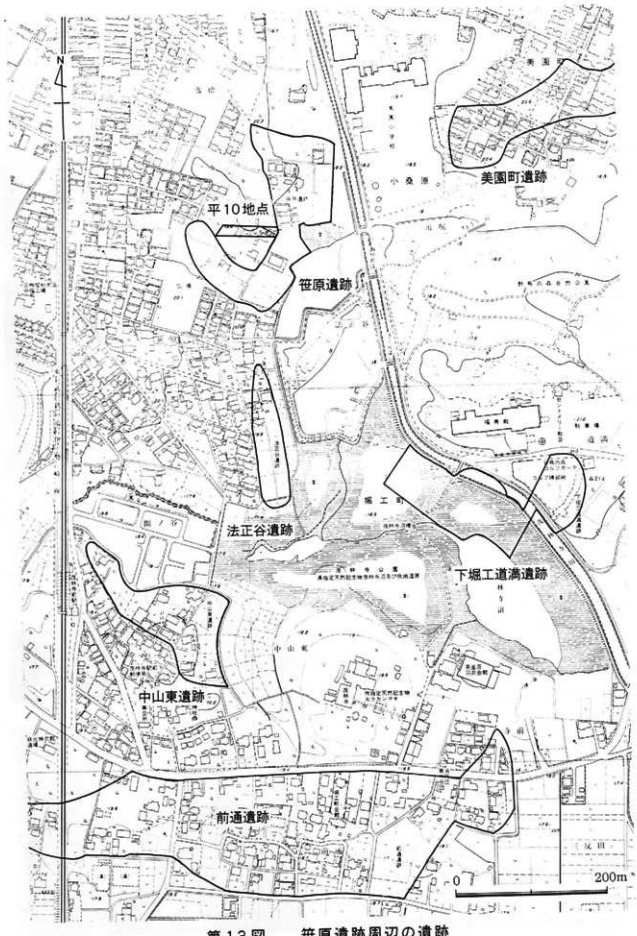
邑楽・館林台地の南縁は、関東構造盆地運動に作用されて浸食が深く複雑な状況を呈している。特にこの周辺には、茂林寺沼をはじめ、東側に蛇沼、西側には東沼、近藤沼と池沼が形成する谷が深く台地を刻んでおり、地形を複雑にしている。

こうした谷によりつくられた舌状台地には、必ず遺跡が立地しており、周辺の遺跡には蛇沼の谷との間の台地上に、南美園町遺跡（111）（縄文・土師）、大原道東遺跡（110）（縄文）、新明前遺跡（112）（縄文・奈良～平安）、咄戸沼遺跡（109）（縄文・土師）などの縄文時代を中心とした遺跡が所在する。

また、近藤沼の谷との間の台地上には、縄文時代及び平安時代の遺物が採取できる荻原遺跡（98）、古墳時代や平安時代の遺物の散布する苗木遺跡（95）、奈良時代から平安時代の遺物を出す中堤遺跡（100）、青柳中島遺跡（96）のほか中世城館址と伝えられる青柳城跡（99）が所在する。

写真26　遺跡全景

写真27　調査前風景（平10地点）



第13図　笹原遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

本地点の発掘調査は、館林市の計画する都市計画道路「茂林寺中通り線」道路改良工事に伴う、館林市堀工町字笹原1876－2他における試掘・確認調査である。

本年度の調査は、土地の買収が終了した土地について、地下の状況を確認するとともに、遺物や遺構の有無の確認を行ったものである。

調査区域の中央部に植作が残っていたため、区域を便宜上3区域に分け、段階的に調査を行った。

調査は、道路用地であることを考慮し、道路の線形に合わせ東西方向に3本のトレンチを設定し、重機により表土を排除した。その後、人力で掘り下げを行い土層の観察を行うとともに、遺物や遺構の検出を行った。

トレンチは、最初、東区で南より北に1～3トレンチ、西区で同じく4～6トレンチ、中央区で7～9トレンチとしたが、調査中、西区と中央区のトレンチを連続させることができたため併せて4～6トレンチとした。

表土を排除した結果、地表下約40cmほどでローム面を確認した。旧地形も現況と同じように、中央区がやや高く、東区、西区は少し低い様子を呈していた。

遺構としては、東区で南北方向の幅3mほどの落ち込みや、中央区と西区との境で同じ幅の落ち込みが確認できたほか、トレンチ各所で不定形の落ち込みを確認した。幅3mほどの落ち込みは、溝状の遺構で、その走向から、旧地割の溝であることが確認された。また、不定形の落ち込みについては、抜木痕や芋穴などと考えられ、住居址などの遺構は確認できなかった。

出土遺物としては、中央区と西区の境で確認された溝状の遺構より、ナイフ形石器が出土しているほか、ローム面の境において、縄文土器や土師器の破片が出土している。

写真28　調査風景（重機）

写真29　調査風景（人力）

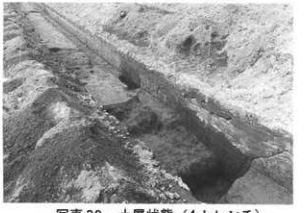
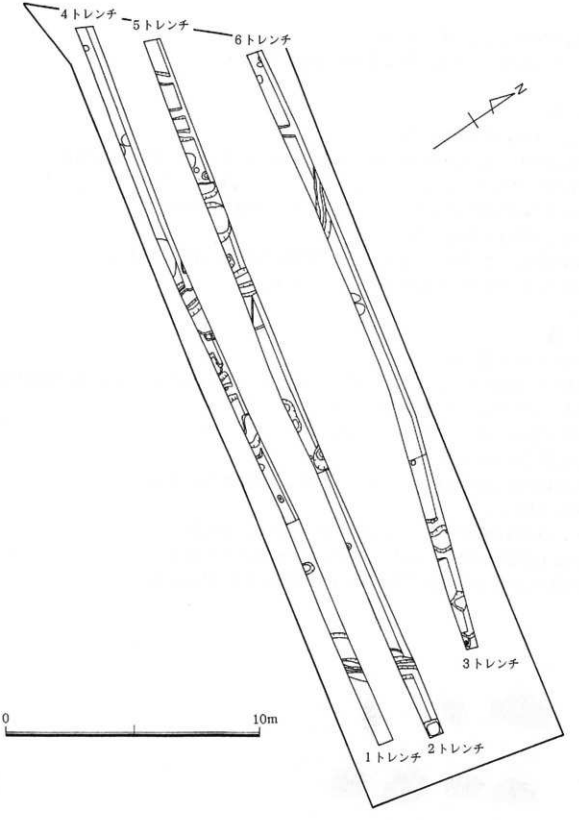


写真30　土層状態（4トレンチ）

写真31　完堀状態（2・5トレンチ）



第14図　笹原遺跡（平10地点）調査区全体図

3．出　土　遺　物

次に本遺跡で出土した遺物を挙げる。
出土した遺物のうち実測、採拓を行ったのは次の7点である。

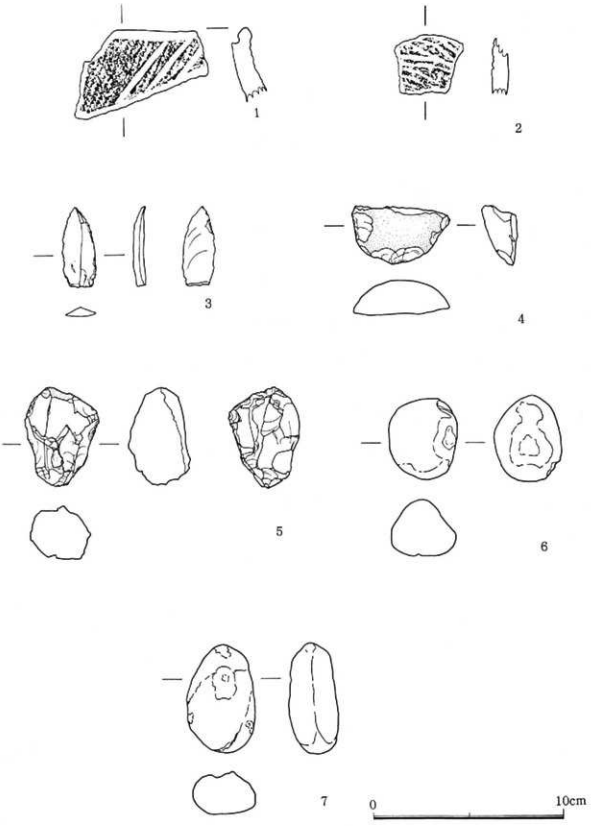
①土　器

1は、深鉢の口縁の破片である。
焼成は良好、胎土は小砂を含みながらも緻密で表裏面ともすべすべしている。色調黄褐色。
口唇部は、竹管により押さえられ、太い沈線を伴って、二重になっている。
文様は、地文に縄文を転がし、その上から竹管による沈線が施されている。
2は、深鉢胴部の小破片である。
焼成は良好、胎土に粗砂を多量に含み表裏面ともにやや粗い。色調は茶褐色。
文様は、地文に縄文、不規則な半裁竹管の沈線が見られる。

②石　器

3はナイフ形石器である。
赤褐色の頁岩製のフレイクを利用。裏面に主要剥離面があり、表面右側の先端と両側の基部に刃つぶし加工（ブランテイング）が、左側には、刃こぼれが見られる。
旧石器時代の所産。中央区と西区境の溝状遺構より出土している。
4は、磨石の破片である。
砂岩質の円礫で表面は良く磨られている。周囲には、剥離痕が見られる。
5は、石核か？
チャートの母岩周辺に剥離が加えられている。一部に自然面を残す。
6は、磨石と考えられる。砂岩質の円礫で、良く磨られ小さくなっている。
7も磨石である。凝灰岩質の円礫で、やはり良く磨られ小さくなっている。

写真32　出土遺物



第15図　笹原遺跡（平10地点）出土遺物実測図及び拓影

■参 考 文 献

館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第32集

館林市教育委員会　『茂林寺沼および低地湿原調査報告書』第2集（1986）

館　林　市　『館林市誌　歴史編』（1969）

館　林　市　『館林市誌　自然編』（1966）

館林市立図書館　『館林双書』第1巻～第25巻

群馬県教育委員会　『群馬県遺跡台帳　東毛編』（1971）

群馬県林務部　『群馬県の貴重な自然　地形・地質編』（1990）

群　馬　県　『群馬県史　資料編1　原始古代1　旧石器・縄文』（1988）

群　馬　県　『群馬県史　資料編2　原始古代2　弥生・土師』（1986）

山　崎　一　『群馬県古城塁址の研究』（1978）

抄　録

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書
副書名	――
巻次	――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第33集
編集者名	岡屋英治　岡屋紀子
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374－0018　群馬県館林市城町1－1
発行年月日	西暦　1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新倉前 平10地点	岡野町字新倉前 高根町字新倉	1207	14	－	－	1998 1998	㎡ 4,328.64	福祉施設
高根・外和田 高根城 平10地点	高根町字外和田 字寺内	1207	11 12	－	－	1998 1998	㎡ 303.33	道路
伝右エ門 平10地点	近藤町字伝右エ門	1207	52	－	－	1999 1999	㎡ 330	駐車場
笹原 平10地点	堀工町字笹原	1207	101	－	－	1999 1999	㎡ 1,046.41	道路

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新倉前 平10地点	包蔵地	平安	－	平安時代の土師器片	
高根・外和田 高根城 平10地点	集落址 城館址	縄文～古墳	縄文時代中期住居？	縄文時代中期土器 土師片　埴輪片	
伝右エ門 平10地点	集落址	平安	－	平安時代土師器	
笹原 平10地点	包蔵地	旧石器～平安	－	ナイフ形石器 縄文時代土器片	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第33集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印 刷 所　オーラ印刷有限会社
発行年月日　平成11年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
地域の文化と歴史をみなおそう